台大日本語文研究第 15 期
2008 年 6 月，頁 41-54
2008-0525 收稿，2008-0728 通過刊登

《今昔物語集》裡龍的故事與中國文學

陳明姿*

摘要

中國自古便有各種有關龍的傳說，後來在佛教傳入中國之後，又傳入了不少新的龍的故事，而這些故事又在中日兩國頻繁的交流之下傳入日本，日本文學裡也出現了不少龍的故事，尤其《今昔物語集》裡更是出現了各式各樣的龍的故事，小稿爲探討中日兩國文學裡的龍的角色的關聯及異同，特別聚焦於《今昔物語集》裡的龍的故事與中國文學裡的龍的故事的關聯及異同，希冀藉此對兩文學的特質有更進一步的瞭解。

關鍵詞：《今昔物語集》、龍、佛教、《太平廣記》、《大唐西域記》

* 台灣大學日本語文學系教授

The story of dragon on *Konzyakumonogatarisyuu* and Chinese literature

Chen, Ming-tzu*

Abstract

Since ancient times, there are various dragon stories in China. Along with the spread of Buddhism in China, more and more Indian dragon stories come to China. Those stories also spread to Japan. So there are lots of dragon stories in Japanese literature, especially in *Konzyakumonogatarisyuu*. Focusing our attention on *Konzyakumonogatarisyuu*, we are going to survey the role of dragon in Chinese and Japanese literatures, their connections, similarities and differences. Hope we'll have a better understanding of Chinese and Japanese literatures.

Key words: *Konzyakumonogatarisyuu*, dragon, Buddhist, *Tai-Ping-Guang-Ji*, *Da-Tang-Xi-Yu-Ji*

* Professor of the Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

『今昔物語集』における龍の説話と中国文学

陳明姿*

要旨

中国には古くから龍にまつわる伝説が多く見られる。そして、時代が降って、仏教の伝来とともに、仏典や仏教説話などを通して、さらに新たな龍の話型が中国に伝わってきた。そのため、中国にはさまざまな龍の説話が見られる。そして、これらの多くの龍の説話は日本と中国が頻繁に交流していたもとに、日本にも伝わってきた。日本文学にはさまざまな龍の説話が見られる。とりわけ、『今昔物語集』の中に、各種の龍のキャラクターが登場する。小稿は日中両国の文学における龍の説話の関連および異同を探究する端緒として、特に『今昔物語集』に焦点を当て、『今昔物語集』の龍の説話は中国文学の龍の説話といかなる関連を持つのかを検討し、その上、両者の異同を考察し、両文学の特質を探究するための試みである。

キーワード：『今昔物語集』、龍、仏教、『太平広記』、『大唐西域記』

* 台湾大学日本語文学系教授

『今昔物語集』における龍の説話と中国文学

陳明姿

一、はじめに

龍は現代人にとっては想像上の動物に過ぎないが、古代中国人にとっては実在した生き物である。河南濮陽の墓から発掘された仰韶文化（新石器時代、紀元前 5000 年から 3000 年まで）の中から、貝殻のアレンジした龍の図形をしたものが見られたし、『山海経』『易経』『左伝』『淮南子』『荘子』などの古い文献においても、龍に関する伝説が多く記されている。中国には古くから龍にまつわる説話が多くある。そして、時代が下ると、仏教の伝来とともに、インドや西域各国から、仏典や仏教説話などを通して、さらに新たに龍に関する説話が多く中国に伝わってきた。そのため、六朝や唐代以後の文学には、いっそうバラエティーに富んだ龍の説話が現れるようになった。そして、これらの龍の説話は、多くの典籍（中文訳の仏典をも含めて）とともに日本にも伝来した。『日本書紀』以来、多くの龍のキャラクターが日本文学に登場することとなった。とりわけ、『今昔物語集』の中に、各種の龍のキャラクターが現れるようになった。小稿は日中両国の文学における龍のキャラクターの関連及び異同を探求する端緒として、特に『今昔物語集』に焦点をあて、日本文学の龍が中国の龍の説話といかなる関連を有し、且どういう異同が見られるのかを考察しようとする試みである。

二、『今昔物語集』における竜と中国文学の中の竜

龍は『説文解字』によると「鱗蟲之長、能幽能明、能細能巨、能短能長、春分而登天、秋分而潜淵」[1]と説明されている。即ち、龍はさまざまに形を変え、且水と深くかかわっている存在である。そのため、龍はしばしば水神、雨神として文学に登場する。台湾の農民

[1] 段玉裁『段氏説文解字注』宏業書局（1971.7）P.415

暦には今でもかならず「～龍治水」(竜が多いほどその年の雨量が多い)という記録があることからもその一端が窺える。そして、このような水と竜とのかかわりまでも龍という漢字とともに日本に伝わってきだろうことは『日本書紀』で海神の息女である豊玉姫の正体は龍だと語られていることからも、古代日本人が龍を水を司る神として考えていることが明らかである。[2]

又、龍を雨神として語られる例もある。『今昔物語集』巻第十四、四十一の「弘法大師修請雨経法降雨語第四十一」にはその一例としてあげられる。

天下旱魃して、天皇をはじめ全国の人々が苦歎いている時、弘法大師が天皇の命を受け、神泉苑で請雨経の法を修し、七日経つと、「壇ノ右ノ上ニ五尺許ノ蛇出来タリ。見レバ、五寸許ノ蛇ノ金ノ色シタルヲ戴ケリ。」[3]天竺の阿耨達智池の善如龍王が現れ、まもなく西の方から黒雲が湧き出て、国中あまねく雨が降ったという。当時では、そういう類の話が多くあるようで、『宇治拾遺物語』第二巻の第二話もその例の一つである。その話の中でも静観僧正の敬虔な祈祷により「雲むらなく　大空に引き塞ぎて　龍神震動し　電光大千界に満ち　車軸のごとくなる雨降」[4]ってきたのである。いずれも雨を降らして人々を旱魃の苦しみから救い出してくれるのは龍だと語っている。即ち、古代日本でも龍が雨を降らす能力を持っていると考えられていた。そのため、旱魃が起きると、霊験あらたかな僧侶に龍神に雨を降らせるように修法してもらうのである。

中国においては、早く『抱朴子』の中で、龍が雨を降らせることができることが語られている。その話は凡そ次のようなものである。

---

[2] 坂本太郎他校注『日本書紀 上』岩波書店（1967.3 第一刷。1972.4 第 6 刷。）の P.167 には「天孫猶不能忍、竊往覘之、豊玉姫方化為龍」とある。（圏点筆者）

[3] 馬淵和夫校注・訳『今昔物語集』小学館（1971.7 初版。1989.12 第十七版。）P.594

[4] 小林智昭校注・訳『宇治拾遺物語』小学館（1973.6 初版。1990.9 第十八版。）P.96

秦の使者甘宗が西域での見聞を奏上するのだが、それによると、「外国方士」で「神呪」をよくするものがおり、川に臨んで息を吹くと、龍が浮んできて、最初は数十丈の長さもあるが、方士が息を吹く度に、龍の身長が縮む。最後はついに数寸の長さまで縮んでしまう。それを取って壷の中に入れて、わずかの水で飼っておき、旱魃のところがあると聞くと、そこへ行って龍を売り雨を降らせるという。[5]

この話は秦の時代の使者甘宗が西域での見聞を語ったような口調で書いたものである。ここでの「方士」はあるいは僧侶のことを言っているかもしれない。『大唐西域記』のような仏教関係の本の中に、龍が雨を降らせる話がよく見られるからである。こういう話は当時の中国人にとって、まだ珍しい話であったろうが、時代を降って、仏教が盛んになるにつれて、僧侶が龍を召して、雲雨を興させる話も現れるようになった。『太平広記』巻第四百二十一の中には、唐代の兵部尚書蕭昕にまつわる次のような話が見られる。

蕭昕が京兆尹を勤めていた時、旱魃が起きたので、静住寺の天竺名僧不空三蔵法師に龍を召して、雲雨を興すように頼んだ。三蔵法師は最初は龍を召して雲雨を興させれば、風雷の災も起きるから、かえって農作物に害を与えることになるといって断るが、蕭昕に再三に頼まれ、やむをえず承諾する。三蔵法師は修法して暫くすると、木の皮の上に小龍を置いたものをもって現れ、それを蕭昕に渡して、曲江に投げ入れるように言った。蕭昕が言われた通りにすると、俄かに暴雨が降り出し、道路が水であふれてまるで溝のようになったという。

僧侶が龍を召して、雲雨を起こす話はインドや西域から中国に伝わってからさらに日本に伝わったと考えられる。しかし、『山海経』の中に「大樂之野　夏后啓於此儛九代乘雨龍」[6]とあるように、古代中国の神仙思想では仙人や優れた能力のある人も龍を使うことがで

[5] 李昉『太平広記』巻第四百十八の「甘宗」新興書局（1969.12）
[6] 袁珂校注『山海経』「海外西経」里仁書局（2004.2）P.209

きると考えられている。そのためであろうか、中国の方では、僧以外の人でも龍を使って、雨を降らせる例が現れる。『太平広記』巻四百二十三の「豢龍者」の中で龍に雨を降らせるのは僧ではなくて、処士であった。そして、日本の方では龍が雨を降らせることによって旱魃が止まるという例のみがみられるのに対して、中国の方では、さらに、龍を使って雨を降らせると、旱魃が解除されるが洪水になってしまう例が語られている。

又、雨を降らせる能力があるとはいえども、龍はかってに降らせることはできない。『太平広記』巻四百十八の「李靖」を見てみよう。李靖が宿を借りる龍の家に雨を降らせるようにとの天符が来た。龍母は家に息子がいないから李靖に頼むことにした。ところが李靖は天上界の規則を知らず、龍母に言われた通りの雨量を降らさなかった。そのため大洪水になって、その村の人は全滅した。それで、龍母も天帝からきびしい処罰を受けることになった。

この「李靖」からも分かるように、中国では、龍がいつどのぐらいの雨量を降らせばいいのか、かならず天帝の命令に従わなければならない。さもないと処罰されることになる。『西遊記』の中の龍王も、天帝が命を下したとおりの量と降雨の時を守らなかったために、唐の大臣魏徴に首を切られてしまっている。即ち、雨神龍は道教の最高神天帝に支配されていると考えられることがわかる。

『今昔物語集』巻第十三第三十三話の中にも、龍がかってに雨を降らせたために、殺された話が見られる。この話の中で、大梵天王をはじめとした仏法の守護神達が国の災をなくすため、雨を降らせない。だが、長い間雨が降らず、国中に旱魃が起きた。龍は恩人の僧の難儀と天下の旱魃を救うために、雨を降らせるのだが、そのため、罪を犯すことになり、大梵天達に殺されてしまったという。[7]

この話は『法華験記』に基づいて書かれた話である。そのため、龍を支配する超自然界の力も仏法の守護神大梵天王達だと設定され

[7] 馬淵和夫校注・訳『今昔物語集』小学館（1971.7 初版。1989.12 第十七版）P.435-437 参照

ている。中国の方では雨神龍が道教的色彩を鮮やかに帯びているのに対して、日本の方では仏教的色彩を濃くもっていることがわかる。

楚辞によると、龍は「神龍失水而陸居、為螻蟻之所裁」とあるように、海や池などの水の世界では強い力を持ち、悠々自適の生活をしているが、一旦水から離れると、力を失ってしまう。その性質を利用して、龍を食そうとした道士の話がある。『太平広記』巻四百二十一の「任頊」に、道士が呪術で池の中の水を涸し、その中の黄龍を食べようとする。水がなくなると、黄龍は神通力を失い、抵抗できなくなることを道士は利用したのである。しかし、黄龍はまえもって老人に化けて任頊に助けてもらうように頼んでいたため、池の中の水が涸れるやいなや、任頊が大きな声で「天有命、殺黄龍者死」[8]と叫び、池の中の水を再び満たす。任頊は前記の言葉を三回もくりかえして叫んだため、道士はついに黄龍を殺すことができなかった。その後任頊は黄龍から驪珠が酬られたという。

『今昔物語集』の巻第二十の第十一話はこのような龍の性質をもとにして語った話である。

これは讃岐国の万能池の中の龍は、ある時池を出て、堤の辺に小蛇の形で蟠っているが、天狗に捕えられてしまう。龍は力が強いから、俄かに食べられない。しかし、龍も水がないと、神通力を失い、飛ぶこともできないから、天狗に囚禁されたままになっている。が、同じく天狗に捕えられてきた比叡山の僧から一滴の水をもらうことで、力を取り戻し、僧を背負い、山の洞から飛び出して、自由自在に空を飛ぶことができるようになったという話である。

『太平広記』任頊」も『今昔物語集』当該説話も同じく水から離れると力を失う龍についての話であるが、『今昔物語集』の方では僧と天狗の間の出来事であるのに対して、中国の方では道士と任頊で、龍を救出する方法も任頊が「天有命、殺黄龍者死」と叫び、天帝に訴えるもので、この類の話も日本の方では仏教的色彩が濃いのに対して、中国の方では、道教的雰囲気が漂っている。

[8] 李昉等編『太平広記』巻四百二十一 中華書局（2006.6）P.3430 参照

しかし、「任項」の中の龍は、もう一つ報恩譚的要素をも帯びていることは龍のキャラクターをかんがえるうえでみのがせない。龍が恩人に珠や金餅を与える類の話は仏教説話の中で多く見られるものだが、『太平広記』四百二十に収められている『法苑珠林』の「倶名国」もその一つである。「倶名国」は僧祇律が語るような形で書かれている。話の中にある商人が龍王の娘を助けたお礼に龍宮に案内されて、歓待された上に帰りにさらに、龍女から八つの金餅をもらうという話である。話の中の龍は従来の中国の龍と違って六道輪廻の畜生道の生きものとして位置づけられた。そして、龍が様々な苦しみから解脱するために、仏教の菩薩道に帰依したと語られている。仏教的色彩を濃く帯びる話である。そして、こういう話はインドや西域から多く中国に伝わって、さらに日本に伝わったろう。『今昔物語集』にも多く見られる。しかし、中国の方では仏教的なものと道教的なものと両方あるのに対して、『今昔物語集』の方では中国の話を伝える震旦部の第十巻第三十八話（青龍が恩返しのため猟人に珠をあげた）に特に仏教的色彩が見られないのに対して、本朝部にあるのはやはり仏教的な色彩の強いものである。ここでは『今昔物語集』第十六巻の第十五話「仕観音人行龍宮得富語第十五」を見てみよう。

観音の敬虔な信者である若い男が、ある日如意作りの男につかまった小蛇（龍王の娘）を助けた。そのお礼に龍宮に案内され、帰りに龍王から金の餅をもらって生涯富み栄えたという。

これはさきの『法苑珠林』の中の「倶名国」と同じく仏教説話の中の龍女の報恩譚の話型だと思われる。このように龍には報恩とともに語られる話があることには注目しておくべきだろう。

次には『今昔物語集』震旦部に収録されている巻十の第二と第三の劉邦についての話に目を移そう。

劉邦の母親劉媼がある日池を通りすぎる間に、雷が鳴り響いたので、こわくて堤に低く臥したが、雷がとうとうその上に落ちた。その雷は実は龍王である。やがて劉媼は懐妊し、劉邦が誕生した。龍

の子である劉邦が将来天子になれるのだが、そのために時の為政者始皇帝に命を奪われることを危惧し、芒山と崵山（今の安徽省崵山県）に隠れていた。その時、そこの空に常に吉兆を示す五色の雲が現れたため、秦の始皇帝もそれに気付いたが、ついに彼を捕えることができなかった。そして、劉邦のほかにも皇帝になる可能性のある龍の子がいたが、赤龍の子である劉邦をしてライバルの白い龍を切り殺すことになる。ライバルも消された以上、劉邦はその後、当然のこととして帝王になるのである。この二つの話は明らかに『史記』巻八の高祖本紀第八の話をふまえて語ったものである。劉邦のこの伝説からも中国では漢に至って、龍が地位が高くなったことが窺われる。

勿論『今昔物語集』の方では『史記』ほど詳しく書いていないが、両者の間の最大の違いは、劉邦が白蛇を切った時期の違いである。『史記』の方では劉邦が白蛇を切ったのは彼が亭長を勤めている時であるのに対して、『今昔物語集』の方では、彼が項羽を討ちに行く途中である。そのため、白蛇に象徴される人物もそれぞれ解釈が異なっている。『史記』の方では秦の皇帝を匂わせているのに対して、『今昔物語集』の方では項羽を思わせる。[9]しかし、どちらも劉邦がもう一人の皇帝になる可能性のライバルを倒したこととして解釈できる。ここには、王の象徴としての龍がみられる。

漢の高祖の後も龍は王の象徴とされている。日本においても『台記』巻三の中に堀川院がなくなってから、北海の龍王に生まれ変わったという話が見られる。[10]何故龍に生まれ変わったのか、ここでは説明されていないが、特に帝王と関連付けて語る様相は見られない。『台記』の記述の中ではその文章の中で、定国が堀川院を慕うために、「出家之後、期年而造龍頭舟、乗之、以佛経置於内懸帆、南風烈時、浮北海」[11]とあるところからすると、「佛経」の力によって何

[9] 小峯和明校注『今昔物語集 二』岩波書店（1999.3）P.297
[10] 増補「史料大成」刊行会『台記』臨川書店（1965.11）P.93-94
[11] 同注 10

かをしようとする意図が見られる。よって、この話はむしろ仏教と関係のある話といってよい。『平家物語』にも天皇が死後龍に生まれ変わった例が見られる。建徳門院徳子は平家一門が滅亡された後、夢の中で安徳帝及び平家一門が龍宮城に生まれ変わって、龍畜経にある苦しみを受けたことを見たとある。即ち、安徳帝たちは非業の死を遂げたため、その恨みと苦しみによって、ついに成仏できず、龍畜道に陥ちいるのである。この安徳帝の例を考えると、堀川院が死後龍に生まれ変わったことは、むしろ龍畜道に陥ってしまったことをもの語っている。

中国においても、死後龍に生まれ変わる話がないわけではない。『太平広記』巻第四百十八の「梁武后」はその例である。

梁武后は梁の武帝の后で、非常に嫉妒深い女性であった。武帝が即位した後、諸事にとりまぎれ、すぐ彼女を皇后に冊命する余裕はなかった。彼女はそれにおこり、井戸に身投げしてしまう。周りの人たちがすぐ助けに行くが、手遅れであった。后は忽ち毒龍に生まれ変わり、煙炎が井戸の中から高く燃えのぼったので、誰も近づくことができなかった。[12]梁武后は恨みをもって死んだために成仏できずに毒龍に生まれ変わったというのである。この話は従来の中国の龍の伝説と明らかに色彩が異なっている。梁の武帝は非常に敬虔な仏教信者で、彼にまつわる仏教説話が多くあるのだが、その后の話として成仏できなかった人間の転生としての龍が語られる点に興味を覚える。

「梁武后」は『両京記』から載録されたものだが、この『両京記』は唐代の韋述によって書かれたものである。韋述はどこからか龍に転生した武后の故事を聞いて、『両京記』を書くに際して、武后の話を取り入れたのかもしれない。この話自体は仏教が中国に伝わってからできた話だと思われる。『大唐西域記』や『法苑珠林』の中にも龍に関する説話が多く収められている。中では恨みや悪願、悪報で龍に生まれ変わったものが多く見られる。そして、一旦龍として生

[12] 注 8 同掲書 P.3406

まれると、熱風、熱砂に身を焼く苦、暴風雨に住居、着衣を破られる苦、金翅鳥に食い殺される苦などのような苦しみを耐えなければならない。龍として生まれたのは「前世の罪」によると考えられているからだ。[13]そういった龍の話は『今昔物語集』の中に多く取り入れられた。巻三の第七、第八、第九、第十一などはその例としてあげられよう。

仏教思想の中での龍のイメージは明らかに中国の従来の龍のそれと異なっている。そのため、仏教が中国に伝わってから、中国文学の中の龍のキャラクターもいっそうバラエティーに富むようになったのである。

三、結び

以上、『今昔物語』を中心にして、両国の文学における龍のキャラクターの関連及びその異同を考察してみた。まだいくつかの課題が残されているが、およそ次のようなことがいえよう。

中国において古くから、様々の龍の伝説が見られるが、漢に至ると、龍の地位が非常に高くなり、帝王の象徴だと尊められる。それに対して、仏教の世界では龍として生まれ変わるのは前世の罪によることと考えられ、龍はむしろ畜生道に堕ちることだとされている。仏教説話も種々な龍の説話をもっていた。中国に伝来した仏教説話の影響のもとで、そこではもともとの龍の説話に加え、さらにバラエティーに富んだ龍の説話が作り上げられることになったた。そして、これらの龍の説話は漢字文化とともに、日本に伝来し、日本文学にも影響を及した。天竺、震旦、日本の説話を集大成した『今昔物語集』を通して考察すると、龍のキャラクターは実に多彩である。まず旱魃の時、龍が雨を降らせ、人々を苦しみから助け出す能力をもつと考えられていた。しかし、雨を降らせる能力があっても、か

[13] 今野達校注『今昔物語集一』巻第三「釈種成龍王婿語第十一」のなかで龍の娘が釈種に「我レ前世ノ罪二依テ、カク悪趣二生レタリ。」とものがたる。岩波書店（1999.7）P.226

ってに降らせることはできない。かならず大梵天王などの神仏の命令に従わなければ、罪を犯したことになり、首を切られることになる。そして、強い力を持ち、水の中で自由自在に逍遥できるが、一旦水を離れると、神通力を失い、天狗に囚禁される身になってしまうこともある。又、宝珠や金餅など世にも稀な宝物の持ち主でもある。それらの宝物を恩人や敬虔な仏教信者などの善人に与えれば、その善人が忽ち豊かな長者になるという。逆に人間から明珠などの宝物を奪取する悪役になる場合もある。これらの説話の筋は殆ど中国の話型と類似しているが、『今昔物語集』の本朝部では中国説話のように龍を帝王の象徴として語る例はついに見られない。又、中国の方では仏教的色彩と道教的色彩のものと両方が見られるが、日本の方では殆ど仏教的色彩を濃く帯びているものばかりであるという龍の差異を指摘しておきたい。